平成２３年２月１９日

北海道教育大学外国語活動実践交流会に参加して

せたな町立若松小学校
教頭　佐々木　朗

１．日時　平成 23 年 2 月 13 日（日）
実践交流会は土曜日より実施
２．場所　札幌市かでる２・７
３．内容実践発表
「学校ぐるみで取り組む研修体制」釧路市立釧路小学校　川崎民子先生
「進んで機構、話そう、分かり合おうとする子をめざして」神奈川県座間市立入谷小学校　教頭　直井　恵子先生
「小学校教育としての外国語活動　～コミュニケーション再考～」　佐賀県教育センター主事　宗　誠
シンポジウム「地域・校内で外国語活動の研修をどう進めるか」北海道教育大学札幌校　萬谷　隆一先生　川崎　民子先生、直井恵子先生、宗　誠先生
グループディスカッション
（私が参加した発表、講演のみです。）

４．内容の概要
（１）釧路小学校の実践
　最初はみんな不安だった（道の分野だから、英語そのものが、ＡＬＴとのやりとりが、英語を話すのが）。
　模擬授業・研修会の実施～担任が主導権を持つ。授業スタイルについての理解が深まっていった。
　教師のための英語掲示からよく使うクラスルームイングリッシュを、その日の授業のターゲットを教室後方に掲示。公のカンニング。

　金曜日は英語の日、校内全体でできるだけ英語を使おうとする日。英語以外の教科で盛り込むことも。朝の打合せも英語で。
　ピクチャーカード、効果のあった教材、アクティビティーの共有化など、一度作ったものはみんなで使う。
　このような校内研修を通して、職員全体が英語活動についての理解を深め、誰もが英語活動を進めることができる環境づくりができた。教師の変容が授業に反映され、児童が生き生きとコミュニケーションを楽しむ英語活動を展開することができた。
（２）座間市立入谷小学校の実践
　子どもの実態として、自分の意見をはっきり表現できないというのがあった。そして、教師の願いとして①進んで意見の言える子になってほしい。②外国語活動に楽しんで参加してほしい。③物怖じすることな

く、コミュニケーションをとろうとする子になってほしいというのがあった。そこで主題として「進んで聞こう、話そう、関わり合おうとする子をめざして～コミュニケーション能力の素地を養う英語活動の工夫～」として進めた。

研究組織として、授業研究部（指導案検討、ＩＣＴ活用、ＮＥＴ（native English speaker）との連携)、教材研究部（教材、教具の開発管理、記録)、アンケート部（アンケートによる意識変更の把握)、小中連携（小中連携）とした。

学級担任が外国語活動を進める利点として①子どもの実態をよく把握している。②子どもの実態に応じた活動を計画できる。③子どもの様子を見ながら指導できる。④担任の活動の姿を見て、子どもも意欲的になる。⑤外国語活動の授業のよさを、学級経営に生かせることがある。

研修としては、①授業を中心とした研修会（公開授業、授業についての協議会、講師による講話）②理論について学ぶ研修会（外国語活動の目標の理解、指導方法学習内容）③外国語活動の授業を進めるための研修（理論、授業の進め方、発音、クラスルームイングリッシュ）を行い精力的に活動した。

教材開発部は、授業で使った教材をレッスンごとに整理しだ例もが使えるようにしておいてある。

成果として、担任以外の１～４年生の先生もＴ１として授業をすることができた。教材を工夫することにより児童が興味関心をもつことができた。中学校の先生に見に来てもらうなど連携ができた。教師は自ら楽しんで指導することが効果的だと言うことがわかった。

（３）小学校教育としての外国語活動　～コミュニケーション再考～

コミュニケーションとは、何か、それはスキルとは違う。コミュニケーションとは、よく見て、よく聞いて何となくわかり、反応することである。なかなか日本語に訳しづらい単語である。メラビアンの分析によるとコミュニケーションのうち言語によるものが７％、声によるものが３５％、ビジュアルによる物が５５％であるという。外国語活動で大切なことはもちろんコミュニケーションであるが、そこはなかなか水の下に沈んでいる氷山にように見えにくい物であり、とかく知識や技能で評価してしまいがちなので考えておくことが大切である。

外国へ行っている日本の留学生がよく言われるという。「英語の力はあるけど、コミュニケーションの力がない。」と。企業の管理職が新入社員に求める能力は３つあるという。①一般常識。②問題解決能力（困ったときにどう解決するかという能力)。③コミュニケーション能力。

外国語活動授業のちょっとしたこつとして①まずは、英語活動のねらいを子どもたちに伝える。②ゲームや活動の約束事を確認する。③Information Gap をもたせたや

りとりを意識する。④室もした後に答えてほしいことを言う。⑤ＡＬＴの発話の一部をマネして言う。⑥投げかける英語を紙に書いておき、読む。⑦自分のこと、本当のことを表現する場を設定する（速さを求めすぎることの危険性）⑧ゲームが楽しいわけでは…⑨日本語で言わせたくないことは英語でも言わせたくない。

英語が楽しくないのは、覚えなくちゃいけない先入観があるからであろう。

評価①学習評価～子どものよい点を認めて伸ばす。②カリキュラム評価～教師の指導計画を見直す。③説明責任～英語活動のねらいや望ましい姿などを保護者に説明する。

英語活動はフルコースではない。どこからでも食べていけるバイキング形式でありたい。でもアイスばかり食べるようであっても行けない。英語活動はプラモデルではない。精巧に組み立てるのではなく、設計図とずれてもいい、木彫りの熊感覚が大切である。

５．感想

札幌雪祭りがすぐそばでやっている中、雪像の一つも見ないで帰ってきた研修会ではあったが、今回も「行ってよかった。」と思うことがあった。研修を受けるたびに、今回のキーワードって何だろうと考える。今回のキーワードはずばり、「communication コミュニケーション」である。宗先生が、会場の先生に、「コミュニケーションって日本語に訳すと何ですか。」と問われた。「会話」、「言葉」、「意思疎通」、「意思伝達」いろいろ出たが、ぴったりということばは見つからない。Communication＝コミュニケーションなのであろう。それと似た話を聞いた。日本に liberty という言葉が入ってきたとき、これも日本に言葉がなかった。この liberty に「自由」という言葉を造ってあてたのが福沢諭吉である。他の候補として、「天下御免」というのもあったという笑い話も聞いた。そうなると座席指定も今ごろは、「指定席」、「天下御免席」ということにでもなっていたのだろう。

ということで、コミュニケーションの話だが、言葉だけではないことは、誰でもわかる。言葉以外にどんなものがあるかというと、声の抑揚もあるし、顔の表情もある。前述のように言葉によるものは５．５％であるという研究もある。「たった５．５％か」っていう重いがあって、もっと割合としてあるのではないかと思う一方、人と人の関わり合いは、声や表情で、実に緊張することもあるし、リラックスすることも、心を開くことも、心を閉ざすこともあるのかと思った。

ここで小学校外国語活動の目標をもう一度掲げる。「外国語を通じて、①言語や文化について体験的に理解を深め、②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、③外国語の音声や基本的な表

現に慣れ親しませながら、コミュニケーションの能力の素地を養う。」となっている。

これを何回か読むと、やっぱり英語を話せる技能をアップすることが目標ではないことがわかる。あくまでも「コミュニケーション能力の素地を養う」ということである。だから、何度も繰り返すようだが、英語で話すということだけではなく、アイコンタクト、身振り手振り、笑顔などの表情で、相手と気持ちが伝えあえるということが大切であるということがわかる。

そうなると、コミュニケーション力の育成というのは、外国語活動だけにとどまるものではないのではないかと思う。まさしくその通りであり、日本語でコミュニケーションがきちんと取れるということもまた、大切なことである。

今、あちらこちらの学校にＡＬＴが入っている。多くの場合、教室では、ＡＬＴは「日本語がわからないこと」にしているところが多いのではないだろうか。子どもたちにとって、特に小学校では単なる英語という言語では非常に言いたいことが伝わりにくい。そんな中、ＡＬＴは簡単な単語を使いながら、物をもったり、手振り身振りをしたり、顔の表情をいっぱいに使って、児童に伝えたいことを表現する。また、児童の側にとっても習いたてのフレーズ、黒板に絵を描いたり、ジェスチャーをしたりして、自分の思いをＡＬＴに伝える。実にコミュニケーションの能力を培うにはすばらしい学習方法の一つではないかと思う。

そういう中で、児童は、一言の英語が通じた喜びを味わい、英語に興味を示し、私がいつも述べるように、言葉が違っても、目の色、肌の色が違っても、食事の習慣が違っても、宗教が違っても、笑顔は世界共通で、人間同士は心が通じ合うものであるということを理解していくのだと考える。

今回の研修で楽しかったのは、最後のグループ討議である。小規模校の話し合いで、小規模校らしく、参加者も私を含めて３人であった。オホーツク管内からいらっしゃった校長先生と、教育大の学生、そして、私である。小さい学校は、コミュニケーションとい言っても、相手が限られている。ＡＬＴを効果的に使うことも大切であるが、小規模校同士の連携の大切さなども話し合われた。檜山出身の学生さんが、自分の卒業した小さな学校のことを振り返りながら、コミュニケーションの大切さについて、しっかりと話をしていたのがとても印象に残った。きっとすばらしい先生になると思って声援をしたい。

さて、自分自身この一年間、高学年４名に授業を行ってきた。「英語教師が授業をすると子どもを英語嫌いにする。」というデータをいつも頭の片隅にちらつき、自分自身に「やりすぎるなよ。」と声をかけながら指導してきた。自分の今までの実践からピックアップしたものを、また英語ノートをつまみ食いしながらという計画性はあまりない実践ではあったが、多くの研修会に参加

しながら、自分自身の英語に対する思いでもある、「コミュニケーション」、そして「活動」ということは実践してきたつもりではある。とにかく子どもたちには、次から次へとしゃべらせた。英語のシャワー（児童に無理がかかっていないといいなあと重いながら）で、具体物や黒板に絵を描いたりして、日本語をなるべく使わないで理解させるようなこともしてきた。授業の３分の１位はだまって椅子に座っている学習スタイルから、活動する内容を取り入れるなどしてきた。

まだまだ、修行中だなあと思いながら、このレポートも楽しみながら書いて（誰にもかけって言われているわけではない）、楽しみながらこれからも研修に出かけ、そして楽しみながら、授業実践の機会を作っていきたいと思う。